

3 . 現職教育

はじめに

子どもたちを取り巻く社会状況

高度経済成長期をさかいにして、子どもたちから奪われたものが3つあると、よく言われます。1つには、子どもたちの「遊び場」です。2つ目には、たっぴりとゆとりのある「遊び時間」です。3つ目は「仲間」です。

このような子どもたちを取りまく社会状況の変化とともに、さらに、テストの点が良いとか、走りが速いといった部分的な能力で、他人と比較する子育て、そして部分的、一面的な価値基準での評価、このように子どもにとって大切な成長期における様々な問題点が指摘されています。

教育基本法第一条にあるとおり、教育の目的は、子どもたちに確かな学力をつけることにより、人格の完成を目指すところにあります。

私たちは、朝起きてから夜寝るまでの間、絶えず判断・分別をしながら生活をしています。

“どんな子にしたいのか、どんな力をつけたいのか”を考えるとき、学校教育の基本はこの「判断・分別する機会」をどれだけ多く子どもたちに準備できるかにあるともいえます。学校生活の中で子どもたちに自分で判断する場を豊かに保障し、特に学校・学級行事をとおして子どもたちに、自分で、あるいは自分たちで考えて判断して行動するということを大切にさせたいと考えます。

(1) 研究主題

学ぶ力を育てる

(2) 研究の経過

本校は、昭和58年に開校し、研究主題を「子ども一人一人の基礎学力を充実させる指導のあり方の追求」と設定して、3つの具体的な柱を基にして研究を進めてきた。

その1つ目は、「基礎学力の充実をめざし、授業の組み立てを明らかにする。」2つ目は、「生活と学習の接点にメスを加え、指導に生かす。」3つ目は、「一人一人のめあての定着・深化をはかる。」である。この年は、「自己教育力」という言葉が大きく取り上げられ、21世紀に向け、これからの小学校教育はどうあるべきか、議論された年でもあった。

この研究主題を基に実践を通して、いつも楠見西小の子どもたちを見つめ、生涯教育に必要な基礎となる力の育成に努めてきた。そして平成2年度からは、時代の変化や楠見西小の児童の実態を考え、新しい研究主題として「子ども一人一人の学ぶ力を育てるための指導のあり方の追求」を設定して、実践研究が始まった。これは、今までの主題「基礎学力の充実」を受け継ぐものであり、基礎学力を生活習慣と学力の基盤ととらえ、「読み・書き・計算」はもちろん、「自ら学ぶための基礎的な力」と「たくましく生きるための基礎的な力」と位置づけ、さらにそれを活用する段階の研究を進めた。

昭和60年度より、重点課題を「中心になる語句に気づかせながら正確に取り取り、主題に迫らせるには」として、物語文の読解指導を通して、子どもたちに読み取る力をつける研究を行った。

昭和62年度より、重点課題「確かに読み取る力を育てる」に取り組み、国語科の物語文の読み取り指導を通して研究実践を進めてきた。

更に、平成11年度からは、重点課題を「豊かに表現する力を育てる」と設定し、国語科を中心にして研究に取り組むことになった。その理由としては、平成14年度から始まる新学習指導要領では、国語科で、文学的な文章の詳細な読解にややもすれば偏りがちであった今までの指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てる指導が重視されていること。また、本校児童の様子を見ると、「確かに読み取る力」はある程度の成果が現れたが、書く力に個人差があったり、自分の考えを発表する子が限られていたり、発表が話し合いまで深められない等の実態があったからである。

一方、昭和61年度より本校の実態に沿った取り組みとして生活面の重点課題を「正しい人間認識にもとづいたものの見方・考え方のできる子を育てるには - 同和教材の学習を通して - 」として、研究実践を積み重ね、平成4年度より学級活動等で友達の話に耳を傾けられない子ども、自己中心的な子どもが多い等の実態から、重点課題を「正しいものの見方・考え方のできる子を育てる」として、研究を行ってきた。

平成12年度からは、研究の視点をさらに明確にすると共に、学習面と生活面を統合した実践研究を行うため、2つの重点課題を1つにしぼり、新たに研究課題として「豊かに表現する力を育てる」を設定した。

今までの成果を基にした国語科、または、新指導要領を強く意識した総合的な学習を通して、研究課題に取り組んだ。「書く」「話す」を大切にして取り組んだが、子どもたちの実態から、表現する力（発表）は年々高まってきたようになってきているものの、書く力に個人差があり、発表する子が限られていたり、発表が話し合いまで深められなかったり等の課題も明らかになってきた。

そこで、平成13年度は、テーマを具体的に絞り、子どもたち相互の思いを「伝え合う」ことを大切に考え、研究の方向として「考えや思いをお互いに伝え合う活動をめざして」に設定し、子どもが考えや思いを持つこと、更にお互いの思いを交流する中で、子ども一人ひとりが自分の「思い」を深化することをめざした。

平成14年度からは、更に、子ども同士の「伝え合う」の「合う」部分を大切に、「練り合う」ような学習をめざしたいと考え、研究課題を「学び合い、高め合う学習」と設定し、研究を行っている。

(3) 主題設定の理由

今日、科学技術の発展や経済構造の変化などが急速に進み、これからも一層激しい変化が予想される。これらの変化は、子どもたちを取り巻く教育環境や教育に対する意識に大きな影響を及ぼしている。このような変化の激しい社会においては、自分の個性を生かし、社会の変化に主体的に対応できる能力を子どもたちに持たせることが必要である。

学習指導要領で求められている「ゆとり」の中で「生きる力」の育成を基本的な

ねらいとし、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、「よりよく問題を解決する資質や能力」や自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、「豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」の育成をめざす教育が大切であるとされている。このことは、これからの時代におけるあらゆる分野で、創造的で個性豊かなものの見方や考え方のできる人間が求められることを意味している。そして、それはまた、これからの社会を生きぬく子どもたちが身につける「生きる力」の根源でもある。

ところで、本校の子どもたちの実態を見ると、純朴で誰に対しても人なつっこく、自分本来の姿を出せる等のよい面はあるが、「指示まちのところ」「発表表現力が乏しい」「友だちや先生の話がきちんと聞けない」等学習面、生活面や仲間づくりに関わって、充分育っていない部分が見られる。

例えば、以下のようなことである。

「今、自分は何をしなければならぬか」といった心のスイッチを切り替えられない。従って、「時・所・人」に対するけじめがつけられず、各場における「めあてが定着しにくい。」

各場での指導・経験が実生活につながらず、高学年になっても定着しにくい。生活のリズムがみだれ、朝の出発がうまく行かない。休み明けに不調を訴えることが多い。また、集中力・持久力に欠け、汗を流すことをいとう傾向がある。

自己中心的で「弱い者にきつくあたる」「相手の立場を理解出来ない」等の心配な面がある。また、さびしさを感じさせる子どもが多い。

朝の会や終わりの会、学級の時間等に友だちの話に耳を傾けられない子がいる。

基礎的な学力に関わって、次のようなところが気にかかる子どもが見られる。

- ・語いが少なく、発表や表現（話すこと・尋ねること・考えを表すこと）の力が乏しい。
- ・書くことに抵抗がある子がめだち、自分の考えを持ちにくい。
- ・既習事項（用語など）を十分理解していないため、学習内容が理解しにくい。

このような実態から、私たちは「学ぶ力」の充実をはかるために「子どもを知り、生かし、見つめ直す」ことを大切にしながら、研究主題「学ぶ力を育てる」を設定した。

そこで、私たちは、学ぶ力を「自ら学ぶ力」「環境から学ぶ力」「知識を学ぶ力」の三点ととらえ、子どもの学ぶ力を毎年見直している。

「自ら学ぶ力」とは、個々の子どもの主体性のことである。まず、子ども自身が興味を持ち、学習に取り組む「意欲」を大切にしていきたい。本当に切実感があれば子どもは主体的に動くはずであり、学習教材や場を工夫することにより、小さな意欲から大きな意欲へ、そして、少しでも、子どもの主体性を前面にだした学習へと歩を進めたい。そのような中で、子ども自らの「学ぶ力」が根付くのではなからうか。

「環境から学ぶ力」とは、子どもが体験を通して学ぶ力である。子どもは自分の周りの環境（人・もの・自然）と接するうちに、自分の経験や体験を通して自ら学ぶものである。試行錯誤しながら行う実体験は具体性が高く、非常に理解しやすい

面がある。

「知識を学ぶ力」とは、さまざまな情報（本・テレビ・新聞等）から学ぶ力である。体験したものからの理解も大切であるが、それには限りがあると考えられる。もっと広く様々な視点からの知識を得ることは、より広い世界を知ることになり、視野が広がることである。また、合わせて、学習方法を身につけることも大切である。これも学習への大切な要素であろう。

以上の3つの力がお互い絡み合うように、向上するならば、子どもの「学ぶ力」をしっかりと太らせることができ、個が高まっていくであろうと考えている。

こうした取り組みを通して、本校の教育目標である「豊かな心と実践力のある子ども」に迫っていきたい。

（４）本年度の研究課題

一人ひとりが活躍できる授業を目ざして

（５）研究課題設定の理由

本校では、2001年度より研究課題を「考えや思いをお互いに伝え合う活動をめざして」と定め、「伝え合う」活動をめざして研究実践をおこなってきた。

実践の中での子どもの実態を見ると、子どもの個々の成長は見られるものの、まだまだ、自分の意見を持ち相手に伝えようとする子は限られていた。また、日常生活の中でも、他の子の意見と関わって考えを吟味することが少ないように思われた。

そのため、2002年度から、更に子ども同士の「伝え合う」の「合う」部分を大切にし、考えを「練り合う」ような学習をめざし、研究課題を「学び合い、高め合う学習」と設定し研究を進めきている。

しかし、2008年度の教育実践から、以下のような子どもたちの実態が明らかになってきた。

「自分の考えを発表したり，説明したりすることが苦手な子どもが多い。」（2年）

「挙手する子が少なく，発表する児童が限られている。」（3年）

「みんなの前で声を出して音読すること，発表すること，自分の感じたことを文章に書くこと，などが苦手な子がいる。」（4年）

「自分の考えを発表する，説明する，わけを言う，疑問や質問をするというようなことが苦手な子が多く，何人かの決まった子の意見で学習が進んでしまう。」（5年）

「クラス全体によく発言もする。ただ，その発言が，単語になりがちで，理由付けをして自分の考えを表現するとなると，非常に弱い。」（6年）

「自分の思いや考えを豊かに表現できる子」（2009年度より）

2009年度より、研究課題を「自分の思いや考えを豊かに表現できる子」とし、具体的な取り組みの手だてとして、「書く」「話す・説明する」「聞く」の3つの柱立てをし

実践を進めてきた。

2011年度末反省で、3つの柱を中心に取り組みを進めることはよいが、研究課題をよりみんなで共通理解しやすいものにするため、「自分の思いや考えを豊かに表現できる子」から「一人ひとりに出番がある・活躍の場がある授業」へと変更することとした。

しかし、話し合いの結果、「一人ひとりが活躍できる授業を目ざして」とかえることにした。

(6) 研究課題にせまるために

まず初めに、「一人ひとりが活躍できる授業を目ざして」について考えてみたい。

「一人ひとり」という場合、これはやはりクラス一人ひとり全員ということであり、「活躍できる」とは、授業において私たちが理想とすべきは、文字どおり一人ひとりが自分の思いや考えをもち、それをクラスみんなに対しハッキリとした声で、分かりやすく説明し主張できること。また他の子の思いや考え、意見に対しては、それをじっくりと聞き判断し、さらに自分の考えや意見を主張できること。つまり、私たちは「討論できる授業」を目ざすということである。

ただ研究課題は、私たちの目標である。その目標に至るまでの色々な場面が、実際の授業の場では考えられる。

研究課題にかかっているような全体の間ではまだ「活躍」できないが、例えば、班やグループの中、もっと小さくはとなり同士二人などでなら「活躍」できるのなら、その方法をとることも考えられる。つまり全体の間では、自分の思いや考え、意見は発言できないが、班やグループの間では「活躍」できる。あるいはとなりの子となら言える、ということもこれにあたる。

さらにまた、発言とまではいかないが、「書くこと」ならしっかりと書けるということもこれらの中に入れておきたい。

次に、このような授業が成立するための前提となる、具体的な手立てについて論を進めたい。

、書く。

授業のいろいろな場面で書かせる。授業の導入、途中、終わりなど、その目的に応じて、いろいろな場面で書かせることを大切にす。

書くためには、自分の思いや考えを持つことが必要であるし、自分の思いや考えをもてない場合でも、書くための時間に、自分自身に問いかけたり、思いを巡らせたりできる。また自分の思いや考えを、整理し組み立て直すための、立ち止まりの時間としても有効だと考えられる。

さらに、教師の側からいっても、子どもの書いたものは、今日の授業は、どうであったのかを考察・反省するための材料となるし、さらに次時への足がかりともなる。

また、書くことは、授業の中ばかりではない。毎日の生活で、見たこと・感じたこと、思ったこと・考えたことなどをノートに綴る日記・生活ノート・作文など、いろいろな「書くこと」が考えられる。

、話す・説明する。

授業が成立するためには、子どもの発言がなくてはならない。しかも、その発言が、クラスの他の子(聞き手)が聞いていても、聞いていなくても関係なく、平気でなされ

るようでは、授業に広がりや深まりは生まれにくい。話し手には、聞き手を意識して発言するということが要求される。つまり、一方的に発言するのではなく、みんなの方を向いて、聞き手に分かってもらえるよう工夫しながら、語りかけることが大切である。

しかも、私たち教師は必ず、自分なりの根拠・理由をつけて話す・説明することを、話し手である子どもに要求することが求められる。

、聞く。

聞き手は、話し手の発言に対して、目と耳、頭を働かせ、注意を向けて聞く態度が不可欠である。話し手は何を語ろうとしているのか、自分の思いや考えとどこが似ていて、どこが違っているのか等を意識しながら集中して聞かせたい。そのことをとおして、さらに聞き手の中にも、発言したい、自分の思いを伝えたいといった態度や意欲が生まれてくると考えられる。

話し合いの場を設ける。

自分がもった思いや考えは、クラスの中で話し合われてこそ、より豊かな意味を持つ。自分の思いや考えを、クラスみんなに提示することで、初めて賛同を得たり、また反対の意見に出会ったりできる。そして、そのことがあって初めて、自分の思いや考えを、さらに広げたり深める機会となる。

(7) 具体的な取り組み

学年・ブロックでそれぞれの実践を持ち寄り、交流する。また、その中で話し合われた特徴的な取り組みを全体の場に報告し、実践を広げる・深める。夏休みの登校日に研修の場を設ける。

実践の公開。

各学年が何らかの形（部別学年別・楠見ブロック・授業研究）で、実践を公開する。実技の講習。